



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

ブツダの遺言

今世界は、大国が誘導する過当な競争に翻弄され、紛争は絶えることを知りません。後進国と言われてきた国々も経済成長する中、格差は益々広がり、人々は不信感を募らせています。そんな世界で今注目されているのが、「自分の心を変えていく」ことが真の解決であると説くブツダの教えです。

* * *

4月はブツダと成られたお釈迦様誕生の月「花まつり」です。釈迦族の王子として生まれ、何不自由なく王位継承も約束されていた王子が、その地位や妻子を捨て、出家して修行者となり、悟りに至られブツダになられたということをご存知でしょう。

ブツダは実在のお方ですが、生まれてすぐ七歩歩まれ「天上天下唯我独尊……天にも地にもわれに勝るほとけなし」と誕生宣言をされたとの伝説も伝えられ、釈迦出家の動機は「四門出遊」という有名な逸話で語られています。仏教聖典には、幼い頃から人一倍感受性の強かった王子が他の道に反れず王位を継承してくれるようにと、王があらゆる楽しみを与えるという親心のはからいが、王子の心を益々満たされないものにしたという

ことが、出家の動機だとあります。虫を小鳥が食べ、その小鳥を猛禽が食べる、そのような自然界の定めである植物連鎖、弱肉強食。他の生命によってしか生きられない人間。思うようにならない「老、病、死」という人生の基本的な“苦”に問題提起を抱いて、自分の進む方向を見出されたのです。

* * *

文明がいくら進歩しようとも、必ず老いて死ぬことには変わりはありません。それなのに「なぜ生まれ、そして生きるのか」、「私という存在は、いったいこの世にとってどういう意味があるのか」と嘆き愚痴る私たちです。ブツダはそんな私たちに先立って、「人間にとって、生きる意味とは何か」を、追求して悟りに至り、同じ教えに生きる弟子たちに説いて、その仲間（サンガ）によって仏法は遺され、国々を超え、多くの高僧たちから聖徳太子に伝えられました。

ブツダとは、「目覚めた人」であり、偉大な思想家でした。このブツダの問題意識が、特に行き詰まりを感じさせている世界観の中で、混迷する21世紀を生きる私たちに大切なことを教えてくれているのです。世界中の人々が仏教こそが解決（真の安らぎ）への道であると気づき、求める中に、地球上の

すべての人類共存の道が仏智とともに開けていくことを願わずにおれません。

思うようにならない「老、病、死」は、外からやってくるものではありません。生まれ出た瞬間から私たちの内部にあって、少しずつ増えてくるものなのです。老いと闘うのは、あさはかな思いの表れといえ、病氣と闘うことも、死と闘うことも同じです。これは「治療」や「努力」をやめるということではありません。

「闘う」という思いが「驕り」であるということです。すべてを受け入れ、「仲良く」しなければ「苦」は決してなくなるのではありません。

《「もう師はおられない」と考えてはならない。私の説いた法と定めた律こそが、私亡き後の師である》と言い遺して涅槃に入られました。正しい教えは滅ぶことはないのです。

《過去を追うな。未来を願うな。過去はすでに捨てられた。そして未来はまだやって来ない。だから現在のことがらを、それがあるところにおいて観察し、揺らぐことなく、動ずることなく、よく見きわめて実践せよ。ただ今日なすべきことを熱心になせ。誰があすの死のあることを知らん》。いま現在をしっかりと大事に生きよというブツダのご遺言です。 合掌

奏庵法座 花まつり

日時
4月26日(日)
午前11時より

「真宗宗歌」
法話
住職
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

最近ではめったに見かけられなくなりましたが、4月8日にはお寺の山門に花御堂が置かれ、道行く人々がお花を供えて誕生仏に甘茶をかけ、甘茶をいただいていく風景がありました。甘茶は、子供には決して美味しいものではありませんでしたが、仏教行事の中で花まつりは、子供にとって春爛漫の気候とともに嬉しかった記憶の一つです。気候もそろそろ落ち着いて初夏へと移ってきています。

どうぞお参り下さい。



《仏教の智慧》

幸福はいくら分け与えても

… せまい心を捨てて、広く他に施すことは、まことによいことである。それとともに、志を守り、道を敬うことは、さらによいことである。人は利己的な心を捨てて、他を助ける努力をすべきである。他人が施すのを見れば、その人はさらに別の人を幸せにし、幸福はそこから生まれる。

一つの松明から何千人の人が火を取っても、その松明はもとのとおりに、幸福はいくら分け与えても、減るといことがない。

道を修める者は、その一歩一歩を慎まなければならない。志がどんなに高くても、それ一歩一歩到達されなければならない。道は、その日その日の生活の中にあることを忘れてはならない。…

(仏教聖典)

幸福というものは面白いもので、分かち合えば分かち合うほど、喜びや幸せは二倍にも三倍にもなります。逆に不幸はその反対で、分かち合えば分かち合うほど、その苦しみや悲しみは半分にもなるし、どんどん小さくなっていくものなのです。

長引く閉塞感からか、日本は今また新たな宗教ブームになっているようだ。宗教に関わる者としてありがたくもあるが、そのほとんどは物足らず、真に仏教(宗教)を理解する、伝えるという意味ではかえって邪魔になりかねないものが多い。■最近ゴールデンタイムに、「お寺のぶっちゃけ話」みたいな番組がある。立場上観ておかなければ…と思うが、嫌悪感が先にたって観たくない。バラエティ番組なのだから真面目に仏法を説いてくれとは望まないが、あれで宗教がよく解ったなどというコメントを聞くとうんざりする。■墓や葬式のあり方、供物の供え方、お布施や香典の渡し方などが分かったからといって、仏教の入り口にも達してはいない。かえって日本人の「宗教音痴」を助長させるばかりだ。そんな番組の思惑を分かった上で出演するには、専門を説く以上に技量と腹のくくり方が必要なのに、発言は自分たちのしていることの正当化と守りばかりで情けない。実に「つまらん」■お布施やまじないで病気や難問が解決されるというのは迷信だとわかっていると言うその同じ人間が、形でしか宗教心を見れないというのが現実だ。日本人の宗教心は、信仰という内面より、目に見える風潮にばかり影響されやすいのだ。■先日天皇皇后が、パラオ島で花を慰霊碑の側に向けて献花されていた。いつも見せるお姿だが、それを見るたびに献花やお布施が仏様の方に向けられるようになったのはいつの頃からだろうかと思う。■作法は、そのものを行う意味の表れから生まれたもの。供物を向こうにむけるというのは一見美しいが、そこに見え隠れする生身の人間の価値観、恩着せがましさを感ずる。亡き人に接する時くらいは俗世界のはからいを離れたいもの、先ずそれが、たしなむべき作法だと思う。その行いがあってはじめて、仏となられた人々と偲ぶ者の双方を安らかにしてくれるはたらきとなるのだ。ウイリアム王子が、東北の被災地への献花で花束をさらりと供えられた所作には自然な美しさがあった。 Norimaru